

ライラさんは将棋アイドルになります 2

「あーっ、また落としちゃいました！」

テレビの中で、巫女装束を着た少女が慌ててしゃがみ込んでいた。落とした駒を拾おうとして、さらに滑って転んでしまう。

「あー、やっぱり歌鈴ちゃんはかわええなあ」

デレデレした顔で観ているのは、若竹五段。関西期待の若手棋士である。

「やっぱりああいう子がいいのか」

渋い顔をしながら尋ねたのは、三東五段。若いが、期待はされていない。

「いいっすよー。僕も奈良出身なんすけど、あんなかわいい子はおらんかったなー」

今は、研究会の休憩中。他にも二人メンバーがいるが、買い物に出かけている。

「うーん」

「ドジなところもまたいいんすよ」

「うーーん」

以前なら、将棋界を盛り上げてくれる芸能人に対して三東が複雑な感情を抱くことはなかった。しかし今

は、彼は芸能事務所の経営者。いわば、歌鈴は仕事をする上でのライバルなのである。

「月子さんもドジなところあるっちゃありますよね」

「アイドルが将棋やるからいいんであって、棋士かアイドルは違うのよね」

「そうっすねえ」

月子さんも棋士としてテレビやイベントに呼ばれることはある。けれども、アイドルの仕事はやはりアイドルが上手だ。

「でもね、うちにもアイドル候補が来たんだ」

「えっ、かわいっすか」

「かわいいよ。なんと、ドバイ出身だ」

「ど、どばい？ どこなんやろ……」

テレビ画面の中では、なんやかんやありながら歌鈴が女子大生相手に勝利していた。

「今日もかりんチャレンジ、何とか勝てました！ あー、また囃んじゃいましたあ！」

「かわいいなー」

「わあ、いろいろなお店がありますですねー」

「ちょっと……びっくりしますよね」

月子さんとライラさんは、ショッピングモールに来ていた。平日の午前中ということもあり、それほど人は多くない。

「あそこに行ってみましょう」

月子さんは、一軒の洋服店を指さす。

「すごくきれいな服がたくさんありますです」

「どれか、買しましょう」

「月子殿、どれにするですか？」

「……ライラさんの、ですよ」

ライラさんは、口を開けたまましばらく固まっていた。

「それはなんとも恐縮至極です」

「ライラさん、いつも同じ服だと思って……余計なことだったら、ごめんなさい」

「そんな、とてもうれしいです。でも、いいんでございますか」

「いいですけど……気になるなら、借金にしましょう。いずれすごくお金持ちになったら、私にも何か買ってもらえれば……」

「それでいいんですか？」

「私も、先生にそうしてもらったんです」

少しはにかむ月子さんは、思い出に照れていた。

「助かりますです」

二人は服を見て回り、何着かは買い、そしていろいろな店をのぞいてみた。

「ライラさん、一つ……提案です」

「はい、なんでもございますか」

「アイス食べませんか」

二人の目の前には、カラフルな看板が目立つ、アイス屋さんがあった。

「もちろん、食べたいでございますよ」

「……私、女の子と一緒にアイス食べるの、ちょっとあこがれていたんです」

「ライラさんもアイスは大変好きでございます。でも……」

「ここは、私がおごります」

「申し訳ございませんです！」

二人は満面の笑みで、アイスを注文しに向かった。

「あれ、どうしたんだろう」

三東は、首をかしげた。周りの人たちもである。

場所は、とある城の一角。新しい将棋イベントの前夜リハーサルをしているところだった。月子さんも出

演者のひとりであり、三東はその付き添いで来ていたのである。

「どういうことだよ、来られないって」

「それが、突然連絡がつかなくなりまして……こっちの子は来てるんですけど」

イベント会社の人間が慌てていた。その傍らで、小さな少女が不安そうな顔をしていた。

「あの、今連絡がありまして……事務所が倒産したらしいです」

「なんだって！」

「また……」

どうやら、イベントでレポートをする予定だったアイドルのひとりがこれず、社長やマネージャーともども雲隠れしているらしい。残されたのは、バーターで来ていた若い子だけ。

「また、って君」

「私がいると全部……。あの……すみませんでした」

少女は、頭を下げるとその場を立ち去っていく。

三東は、その後を追った。少女は、公園のベンチに座っていた。

「ぐすっ」

「どうしたの」

「……ちょっとだけ、つらいことがあって」

「イベントのこと？」

「どうして、それを……？」

「僕は、これでも一応プロデューサーで棋士なんだ」

「そうだったんですか……。でも、つらいのはイベントのことじゃなくて、私、アイドルじゃなくなっちゃいました」

「倒産、だね」

「はい……。初めてじゃないんです。私がいるところは、いつも……」

三東は、腕を組みながらしゃがんで、少女の顔を覗き込んだ。

「君のせいで？」

「はい、私の不運のせいで」

「僕のところには、運命を変えた人と、運命を変えられるかもしれない人がいるよ」

「えっ」

「貧乏をどうにかした人と、どうにかしようとしてる人、かな。あ、あと将棋を頑張れるようになった人。君も、変えてみようとは思わないかな？」

「私をスカウトしてるんですか？ ダメです。私にかかると、不幸になります……」

「僕たちの幸せが変えられるかもしれないよ。君は、
幸せになりたくないのかい。アイドルとして」

「私……な、なりたい……です……！」

「よし、じゃあ、なろう。あ、そういえば名前は……」

「白菊。白菊ほたるです」

「ほたるさん。今から君は310プロダクションの一員
だ。お願いして、明日のイベントにも出させてもらえ
るようにするよ。その代わり……」

「はい」

「将棋、頑張ってみよう」